

釣れ釣れなるままに

2003年思い出の釣行記 PART. 5

仄かな明かり  
の中で



鹿島釣狂

## 遊会第5回大会

☆開催日	平成15年9月28日
☆開催場所	小平川～苫前港
☆入釣場所	古丹別川河口右→三豊
☆天候	曇り べた風 東風微風
☆潮	満潮 干潮
☆釣果	アカハラ 492 cm 4匹 川カレイ 259 cm 1匹 重量 3640 g
☆成績	合計 1115 点 成績 4 位 持ち点 4 点 累計点 13点 (3, 1, 3, 2, 4)

### 地震の余波

大会出発日の前日、夜がまだ明けやらぬ頃（4：50、6：08）、体に大きな揺れを感じて飛び起きる。何故だか浦河沖と直感する。釣り大会を控えてその影響はないのだろうか。朝刊に目を通すが、今起きた地震が記事になっているわけではない。テレビをつけると十勝沖地震M6程度とある。津波の最大が浦河で1.3mとなっている。後に海岸縁の状況からエリモ岬では4mを越えたと訂正される。

私たちが海岸で釣りをしていたら、海の藻屑となってしまったであろう。津波は6：30頃押し寄せたとあるから、地震発生から1時間ほどで来たことになる。地震を感じたらすぐに海岸線から撤退することが賢明であると感じた。

後で起き出してきた女房が「帯広の息子は大丈夫かしら」と呟く。釣り大会のことしか頭になかった私には思いもよらない言葉に母親と父親の愛情の深さの違いに愕然とする。それにしても、女房が地震直後も悠然と鼾をかいていたのが理解できない。

勤務終了後、釣り道具を車に積んで、岩見沢の自宅に向かう。午後10時過ぎに芦別に残した女房より電話がある。釣遊会の事務局長である大前氏から留守電が入っており、内容がよく聞き取れないが「地震」とか「小平」とか言っていると伝えてくれた。夜も遅いので明けて早朝、阿部会長に電話で確認する。

十勝沖地震のため、浦河港～エリモ港としていた大会開催場所を小平薬川～苫前港に変更する。併せて予定していた40周年記念大会も第6回大会に延期して開催する。大津海岸では秋サケをねらった釣り人2名が行方不明になっており懸命に捜索活動を行っている。地元住民の感情を逆撫するような行為は絶対避けるべきである。さらに、余震

が続いており、会員の命を危険に晒すような行為を会としてとるべきではない

会長をはじめとする役員の見断は賢明であり、全く同感である。後日の新聞には早速次のように報道された。

余震による津波の恐れがあるにもかかわらず、日曜日にもサーファーや釣り人が大津海岸に大挙押し寄せている。町や警察では現地を巡回し、自粛を求めた。気象情報を聞くためのラジオを持っていなかったり、救命胴着を身に付けていなかったりなどのケースもあり、札幌ナンバーなど十勝管外の車が目立った。巡回は安全が確認されるまで続く

私は今回に限って早くから仕掛けやエサを準備しており、それも太平洋のカジカやアブラコに的を絞ったものである。釣遊会創立40周年記念大会であると同時に、私にとっては意味のある大会になるからだ。今年に入って過去4回の成績では3位、1位、3位、2位であり、7回大会の内の上位5回の成績で争う年間成績でも優勝をねらえる位置にいるのである。

大会範囲が小平～苫前の区間になると対象魚はアカハラになるが、私はそんな仕掛けなど用意していなかった。太平洋のアブラコ、カジカ仕掛けはハリだけみてもチヌ8号や海津18号の大きなものを使っており、口先でエサを吸い込んで就餌活動するアカハラには不向きなのだ。釣り道具等は引っ越しにあわせて少しずつ芦別に転居させており、早速、『カナダ屋釣具店』の9時開店を待って小物を調達する。アカハラ仕掛け3組、念のために嫁対策としてカレイ仕掛けを作る。アブラコ仕掛けのハリを小さくし、オモリも軽いものにする。エサのカツオは虫エサに取って代わる。

集合場所でも一頻り釣り場の変更で右往左往した会員の話が漏れ伝わってくる。札幌の釣り会でも釣り場を日本海に変更し、同じ区間で開催する会もあり、混雑するということだ。我が会は混雑する釣り場に一番乗りし、一等地を確保できるようにと高速を使い、途中の買い物は5分と制限してバスの中で着替えを行った。そして、午後10時過ぎには小平に到着し、仲間が颯爽とバスから下りていった。こんなに早く釣りを始めてイカゴロが朝までもつのだろうか？

## ペンライトの仄かな明かりを頼りに



通い慣れた古潭別川の橋を越えたところで下車する。初めてここに入ったときは、河口に向かう獣道から外れて、深い藪の中を進んだものだから、その藪の下に幾重にもなって転がっている太い流木に足を取られて何度も転んだものである。藪に入っていく前にキャップライトのスイッチを捻ろうと頭に手をやる。しかし、帽子の上に乗っているはずのキャップライトがない。支度の時に必ず頭に装着していたのだが、今回はバスに忘れたようである。本日の釣りは諦めなければならぬだろうか。とりあえず、同行の前野氏を後ろにして、彼のキャップライトの明かりを頼りに背丈の長いヨシの中を進む。

河口に出てみると、昨年とは様相を異にしている。毎年、毎年、河口の形が大きく変化

しているのには驚かされる。自然の驚異というのだろうか、去年は前方に湾曲していた流れが、今年は真っ直ぐになって海に注ぎ込んでいる。海に入る直前で右に流れを変え、その先は比較的深い湾洞を形成しているのだ。

前野氏は躊躇なく河口に入った。私は湾洞に大物が潜んでいるような気配を感じたが、キャップライトがないという不安から前野氏のすぐ横に並んだ。そして、万が一のためにリュックに忍ばせているペンライト（主にキャップライトの電池を交換するために使用）を使うことにした。それを口に銜えて手元を照らし、仕掛け等の準備をする。

ともかく、一投目を投げ終え、2本目を準備し始めた。心細い明かりを頼りにエサを付けていると、早速、一投目の竿が大きく弧を描いて沖へと引っ張られている。初っぱなから40cmを超えるアカハラだ。本日は期待できそうである。しかし、期待とは裏腹にそれを上回るようなものは来てくれず、30cmにも満たないような小物も混じってくるのには閉口した。

ペンライトの電池の消耗を防ぐために、こまめに消してはウェイダーの胸ポケットに入れておく。不便の上ないがこれで明るくなるまで凌ぐしかない。仕掛けが絡んだりして長らく銜えていると、顎の力が衰えて、歯先がガチガチと音を立て始める。45cm越える大物をハリから外して、ニンマリと頬が緩んだ途端、ペンライトを落としてしまった。慌てて口に銜え直すと、ザラッとした砂の感触が広がる。イカゴロを掴んだ手でペンライトを握り、それを銜えるものだからゴロのヌツタリとした味が口の中で攪拌される。グェツとなるが、魚にはこれが魅力的でその誘惑に負けてしまうのだろう。唾液が口に溜まってくる。歯の間にペンライトを挟んでいるため、その歯の隙間からペンライトを伝って、唾液が涎となって滴り落ちる。なんとみっともない姿であろうか。前野氏から声を掛けられても、ペンライトを銜えたままでウーウーと唸るばかりである。

## 爽やかな挨拶

背後から2名の釣り人がやって来た。「『北の釣会』です。隣に入らせて頂きます。よろしくお願ひします。状況はどうですか。」なんとという爽やかさだろう。誰もがこうだと気持ち良く釣りが出来るというものだ。見習わなくてはならないのに、自分の名前は名乗らず、不躰にもお名前を伺うと、『北の釣会』の幹事を20年以上も務めてこられた斎藤氏である。2名とも私の右隣にある湾洞に入った。早速、45cmを超えるようなアカハラをバタバタと釣り上げ始めた。中には50cmを超えるものも混ざっているようである。

自分の竿に目をやると、遠投の道糸が右方向に大きくフケている。アカハラ仕掛けを交わしながら巻き取ると、25cmほどの川ガレイがついていた。嫁が出来た。さらにその後も川ガレイを2匹釣り上げたが最初のを上回ることは出来なかった。

小物に混じって45センチを超える太ったアカハラが何本か上がった。そして、痩せっぽっちだが身長のあるものが来た。そいつを明るくなってからよく見ると、首の回りに釣り糸が絡まっている。前週の大会で釣り人がバラしたもので、エサをとることが出来ない

ために痩せていたのだろう。審査ではこれが頭になった。

前野氏は早くから50cmを超えるものを上げている。更に嫁のソイも釣れたとほくそ笑んでいる。彼はイカゴロの残りが少なくなり、朝方の大物に備えて、20本ばかりを残して砂の上で横になって眠ってしまった。

背後の山並みの稜線が鮮明になり、手元も明るくなってきた。ここで、ようやくペンライトを口から離す。私の動きも活発になる。しかし、50cmを超えるものは来ない。前野氏が起き出して、徐に仕掛けを投げ入れる。大物が次から次へとやってくる。私のイカゴロも底をつき最後に残った1本を天秤の片方にだけ付けて投げ込む。すぐにアタリがあり、これも50cmに近いもので入れ替える。

## ルール

二人ともゴロを使い切ったので、三豊方向にアブラコを狙って移動する。海はべた風で鏡のようになっており沖根を探すことが出来ない。足下に昆布が打ち上がっている場所で闇雲に遠投を繰り返す。ハゴトコが何匹か相手をしてくれたが、川ガレイを上回るものはいずれ出なかった。

荷物を片づけ三豊のバス停に向かうと、山岸、谷口の両氏が幌向川の河口で盛んに竿を振っている。嫁が取れないということである。9時に引き上げた『北の釣会』のメンバーは同じ所でカレイを上げていたと最後の粘りを見せたが、結局、時間になってしまった。

## 審査結果

優勝	庄司幸吉	1376点	(アカハラ482mm+アブラコ419mm+4750g)	花岡海岸
準優勝	前野達志	1315点	(アカハラ520mm+ハゴトコ267cm+5280g)	古潭別川右
3位	嵐光博	1158点	(アカハラ515mm+ハゴトコ223mm+4200g)	小平薬川左
4位	鹿島釣狂	1115点	(アカハラ492mm+川ガレイ259mm+3640g)	古潭別川右
5位	吉井博	1063点	(アカハラ491mm+ハゴトコ185mm+3870g)	小平薬川右

庄司氏の嫁のアブラコが俄然輝きを放っている。それもアカハラを狙った近投のイカゴロ仕掛けに食いついてきたものらしい。彼は平成13年にも同じ場所でアブラコを釣って優勝している。

嵐氏は小平薬川の左岸に一番乗りし、砂州の先端に入っの釣果である。その後、続々と札幌の釣り会のメンバー6名が川筋に入った。釣遊会では川は違反になるが、その会ではどうなのだろう。河口からその川の最初に架かる橋までを釣り場としている会もあると聞く。川と海の境をどの様に考えるかは微妙なところだが、河口岸が弧を描いているのならともかく、鋭角に突き出ている砂州から先の川沿いは違反と判断されてもやむを得まい。今回は海側に入った釣り人のアカハラの型が小さく、川筋には大物がいたということである。

釣り会での釣りは競技として成立しているので、一定のルールに基づいて厳正に行われ

るべきである。ただ単に釣ればよいというものではない。アカハラ釣りを堪能したいのなら個人で楽しむべきであろう。

私はこれからも仲間との約束事を大切にしながら釣りと共に競い合いをも楽しんでいきたい。